

文 法（史的研究—近代）

金 田 弘

○
二年間という短い期間では特に傾向というようなものを指摘することはむずかしいが、大勢として一つには、室町期の抄物を中心に狂言・外国資料のことばの性格を新しい視点から追究しようとする傾向がうかがわれ、一つには、近世語法についての研究に現代語成立とのかかわりから新分野の資料を用いて再検討を加えようとする動向が感じられる。

一

抄物については、資料の発掘・調査が行き届いてきたこともあって、その資料性を詳細に分析し解釈しようとする研究が活潑になされた。なかでも小林千草氏の活躍はめざましく、①「景徐聞書の接続詞」（『国語語彙史の研究』三、昭57・5）、②「文語聞書抄物の接続詞」（『言語と文芸』93、昭57・7）、③「聞書抄物のことばの解明をめざして」（『表現研究』36、昭57・9）がある。①は、『神書聞塵』の接続詞の体系を景徐聞書の他抄と対照して捉えようとした論。②は、その口語的な『神書聞塵』と同時講で文語聞書抄『日本紀聞書』の接続詞とを対照して、文語聞書抄物の接続詞の性格を論

じて、その中核が漢文訓読系出自であることを説く。ともに緻密な論証と周到な洞察力に支えられ、これまでとかく等閑視されてきた抄物の接続詞を取りあげて、講者と聞書者の使用した語との関係を具体的に示し、聞書者の個性によってもその使用の異なるなどという興味深い指摘が多くなされている。③は、①②を含めて、擬声語に関する論考などをふまえて、聞書抄のことばの性格の解明を志す筆者の立場と、今後の課題とが示されている。近世の講述筆記等のことばを究める際にも示唆するところ大である。抄物の「手控」と「聞書」に関して、①伊原信一「清原宣賢講述論語抄に於ける『手控』と『聞書』の文体に就いて——直隸文の重層性を通して——」（『国語国文研究』67、昭57・2）、②古田雅憲「文終止形式から見た莊子抄の成立」（『語文研究』55、昭58・6）がある。①は、直隸表現につき、「手控」の均一性に対し、「聞書」は先行本に依拠する面と、聞書者自身の表現の駆使など対立する二種のものの内包し、それが「聞書」文にリズムと緊張感をもたらす生き生きとした感じを与えているとする。②は、前半は聞書、後半は手控と扱われる宣賢講『莊子抄』につき、サ行イ音便、文末表現の分布等から、前半部は宣賢抄を中心に他抄を参看引用して林宗和により作成され、途中何らか

の理由で放棄されたため後半部が取り合わされたものと推定する。

ともに分析的手法に手堅さは認められるものの、①は直喩表現受容のしかたが「手控」は直截的であり、「聞書」は講者使用の表現を理解して受けとめることから屈折的になる相違で、文語性・口語性の違いを示しているのに過ぎないのではなからうか。②についても、禅門はゞ、博士家はナリ(也)といった学派意識による文終止の在り方だけで片付けられるか問題が残る。なお、文末形式を扱ったものに、国田百合子「長恨歌并琵琶行抄の諸本にみえる文末形式」(『日本女子大学紀要文学部』31、昭57・3)「同ハ続」(『訓点語と訓点資料』68、昭57・5)、川口明美「長恨歌抄」諸本の文体的特質について(『立正大学国語国文』19、昭58・3)がある。

出雲朝子『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』(桜楓社、昭57・10)については柳田征司氏の書評(『国語と国文学』、昭58・8)にあるように、語法よりは音韻についての論考が中心であるが、そのうちのラ行四段活用動詞の音便についての論には、佐竹真次「詩学大成抄におけるラ行四段活用動詞の音便」(『言語』、昭58・7)に反論があり、原形と促音便形の出現傾向は、聞書者・書写者の個人的意識の違いによる可能性の高いこと、促音便化例を分析して、「ラ四運用形+テ・タ」の下に、それと文法的関係の密接な語について一単位化する場合や、一首節語は語尾リの先行音が強く発音されることにより促音便化が進行したと説く。促音化についてはラ行以外の他行にはたして適用されるかが問題となろう。出雲氏の先の論著には、付説として、佐竹論文には引用されていない「抄物以外の資料における状態からみたラ行四段活用動詞の音便形」が収めてある。ここでは、十五世紀半ばから後半にかけてはその促音便化はま

だ完了・固定せず、講者・抄者・聞書者の立場や態度が音便形のあらわれ方の差となっており、佐竹論文で扱われた同じ惟高妙安の抄である音便形専用の『玉塵抄』と、原形専用の『詩学大成抄』『中興禅林風月集抄』については、口頭語における音便形の固定化に伴い、抄物における音便形と原形との関係は、口語と一種の講義口調の文語という関係に変化したものと扱っている。

東国系抄物については、①福島明子「蓬左文庫蔵『江湖風月集抄』の言語の性格」(『島大国文』11、昭57・12)、②樋渡登「報恩録」諸本とその本文をめぐって(『宗学研究』24、昭57・3)、同「国語資料としての『報恩録』諸本の性格」(『都留文科大研究紀要』19、昭58・3)がある。①は、多く編纂の形で成っている洞門抄物の扱い方と東国語資料としての位置づけを試みたもの。②③は、文末形式など言語上の類縁性から諸本の資料性を概括したもの。東国語に関しては語彙が中心だが、①迫野虔徳「梅津政景日記」——江戸時代初期東国語文献——(『九州大学文学部文学研究』79、昭57・3)、②同「東国系抄物語彙覧書」(『文学研究』80、昭58・2)がある。①は、常陸方言資料として語法・音韻についても扱う。②に触れてあるように東国系抄物の語彙から方言を説明することはむずかしいが、①のような資料の発掘がまたれるところである。迫野氏は、東国文献としての活用をその文献当時すでに東国特有の現象であったものだけを選び出すのではなく、西の方言と共通していても、それが東国語の事実ならこれも「東国方言」として考えたいとしているが同感である。

寿岳章子「室町時代言語の表現」(清文堂、昭58・10)は、室町時代語を背景に抄物のことばを置いてその特徴ある性格を解明した戦

抄物研究の先駆的論考を収めてあるが、柳田征司「抄物言語研究の回顧と展望」『愛媛国文と教育』13、昭57・6)は、これまでの抄物研究を三期に分け、各期について詳細にしかも具体的にその成果の要点を捉えて説いている。特に今後の展望として挙げてある諸項目はそれぞれ問題点を的確に指摘しており、これからの抄物研究の指針となろう。

○

狂言台本の研究はこれまでとかく待遇表現の研究に目が注がれてきたが、語法面で、古代語から近代語への過渡的狀態を示そうとする①小林賢次「狂言台本における仮定条件の接続詞」『国語学』132、昭58・3)、②同「恒常条件の表現から仮定条件の表現へ—虎明本狂言の分析をとおして—」(『国語と国文学』、昭58・10)がある。①は、虎明本と虎寛本とを比較し、サラバ・サアラバ系からソレナラバを主とするナラバ系へ交替していく様相を綿密に実証し、表現内容について、相手の発言内容を前提として帰結句に導く「判断的用法」と、場面的転換を示す「契機的用法」を共有する虎明本に対し、虎寛本は「契機的用法」の発達の顕著な点を指摘する。②は、「已然形+バ」の形式による表現の様相を分析・検討し、虎明本は天草版平家物語より已然形から仮定形の機能へと一歩進めた段階にあることを論証する。①については、当該期の生活言語とどう関わりを有するか、また②については、虎寛本が虎明本以上にその形式の未発達ということが狂言台本の性格によるものなのか、他流の狂言台本などとの比較を期待したい。北原保雄・大倉浩『狂言記の研究』(勉誠社、昭58・2)には、「言語資料としての『狂言記正篇』」を収めてある。なお、金井清光「天正狂言本の地域性」(『国語と国文学』、昭

57・8)は、用語・語法や狂言場面等を再検討し、天正狂言本は京都を中心とする畿内のことばが基本になっていると説くが、これが当時の東国語の事実であると認める考え方もある。促音表記ンヤ、借リルなどの扱いについては問題がある。

キリシタン資料については、①細川英雄「『天草版平家物語』の『な一そ』をめぐって」(『国語学研究与資料』6、昭57・7)、②小林千草「キリシタン口語文献の終助詞ゾ」(『国文学会誌(京都教育大)』18、昭58・6)、③豊島正之「初期キリシタン文献の文語文に見える『とも』について」(『国語と国文学』、昭57・3)がある。①は、「な一そ」形式を残す理由を原拠本との関わりの中で十四世紀末の言語の反映しているさまを説いたもの。②は、「ヘイケ↓エソゾ↓虎清本狂言」の順でロドリゲス大文典の記述などに合わないゾが生じてきていることを指摘し、衰退傾向にある当時の口語での実相を示している。③は、同格でないのにトモニを用いる「(x)、yとも」の実態を明らかにし、それは一般の文献の用法を拡張して使った独特のものであり、その多用はポルトガル語等との接触に基いたものであると説くが、その独特の用法が教会内部でしだいに醸成されたとする点は説得力を欠く。また、現代語における問題意識から、金水敏「人を主語とする存在表現——天草版平家物語を中心に——」(『国語と国文学』、昭57・12)の論が示された。中世にあっては、人を主語とするものの中で、キルが用いられる存在文はアルと共存しながら確立されていたことを指摘し、現代語では従来アル専用であったところから有情・非情対立の意味を持つようになったことを説く。問題を取りあげる視点におもしろみがあるが、近世語について

欠き、特にテアル・テイル・テヨルの問題が課題として残されている。なお語法では、大幅に添削された助動詞ヨウ、助詞ソの二論考を収めた、福島邦道『続キリシタン資料と国語研究』(笠間書院、昭58・7)、「尊敬と謙讓」など所収の濱田敦『統朝鮮資料による日本語研究』(臨川書店、昭58・8)が刊行されたが、ともに外国資料の処理が説かれ貴重である。

この期については、①石井みち江「室町時代物語『朝貞のつゆ』『天狗の内裏』の国語資料としての位置」(『国語学研究』22、昭57・2)、②小川栄「『水が飲みたい』『水を飲みたい』式表現の用法差——室町期の状態——」(『日本語と日本文学』2、昭57・11)がある。①は、助動詞タ・人代名詞などから位置づけを示し、②は、これまで指摘のなかった室町期の両表現の状態を五分類して、文体の相違という観点から「がーたい」は、より口語的でくだけたやわらかい表現、「をーたい」は、より文語的で改まった堅い表現という興味ある扱いを示す。また敬語については、接頭辞について論じた国田百合子「女房の敬語」(『国文目白』22、昭58・3)があるが「おみわた」は「御水(湖)渡り」か。西田直敏「『文体としての自敬表現』の本質——豊臣秀吉文書の場合——」(『金田一春彦博士古稀記念論文集』1国語学編、三省堂、昭58・12)では、その自敬表現を絶対的権力を表現するのにもっとも効果的手段と意図して使われたものと考察している。なお、桜井光昭『敬語論集——古代と現代——』(明治書院、昭58・4)には、中世敬語を記述した既発表の論考などを収める。

『講座国語史』4の「文法史」(大修館、昭57・12)には、近代の文法につき土井洋一(丁)、坂梨隆三(Ⅱ上方篇)、小松寿雄(Ⅱ江戸

篇)三氏の論が収められ、それぞれ先行論文をふまえ各期の研究成果を集大成しており、問題点については執筆者の調査や独自の見解も見られ、今後の研究の目安ともなる。特に土井洋一氏の論は回顧と展望が周到になされており、要を得た諸研究のまとめに鋭い考察が加えられ、資料の取扱いを含めて今後に資するところの多い論考といえよう。

二

近世語法については、戯作文学を扱った論文が乏しく、従来ほとんど手のつけられていなかった歌舞伎脚本や講述筆記についての研究に意欲的な考察が見られる。

まず歌舞伎脚本では、①山県浩「活用型の変化から見た上方絵入狂言本——二段活用の一段化の場合——」(『語文研究』52・53、昭57・6)、②同「活用の変化から見た上方絵入狂言本——サ行下二段活用の四段化の場合——」(『文献探究』10、昭57・9)、③蜂谷清人「歌舞伎の語彙」(『講座日本語の語彙』5、昭57・6)がある。①②は標題の活用の変化を判定規準に元禄と享保期の上方狂言本と近松世話浄瑠璃本との比較を通じて、狂言本が非常に口語性に富む資料として価値の高いことを論証する。資料性・文体・位相等を考慮に入れた考察で、なおさらにされてきた上方狂言本の位置づけを示した好論である。武家ことば資料として有用であるとも説くが、③には『五大力恋緘』を使っての武家ことばの特徴の指摘が見られる。

近世の教養層の日常語の実態については関心が高まってきているが、講述筆記については①平澤啓「漢籍国字解の言語——その共通性格——」(『国文学論集』16、昭58・1)、②望月正道「山崎闇斎学派開書

資料の象徴詞『語文研究』56、昭58・12)、③同「筑後久留米の山崎闇齋学派圖書資料について」『文献研究』12、昭58・7)、④金田弘「越後新発田藩儒井東信斎とその講述筆記——幕末期地方教養層の言語について——」(『国学院大学紀要』21、昭58・3)がある。①は、講義物の口語が現代共通語の基底をなすと想定し、それを論証しよう

と試みた論である。とかく文末形式で処理されやすいこの問題を文法体系を比較対照して行おうとする方法は評価されよう。ただし、扱った資料の選択については質と量ともに検討を要し、調査した動詞だけで、講義物の文法体系が現代共通語の文法体系に近いと言いきれるかどうか。崎門派以外の講述筆記類にも目を注ぐ必要がある。②は、門流を異にする講者十人、二四編の筆記の象徴詞の実態を調査し、門流中での類似が認められるところから、当代の日常語の反映に疑念を投げかけ、その出自が日常語でも師説の一部として継承したもので、筆録当時の日常語の保証はないとしてこの種資料の性格に触れている。聞書も門流によって差異があり、また講義と学談とは異なる面もあるが講述資料を扱う場合この指摘は重要である。③④は、講者(筆録者)の方言的要素を示したものであるが、④は、幕末期の東国地方武士層の間に標準語制定を目ざしていた『口語法』に示すところの言語表現が認められることを説く。なお、木坂基「『アゴザル』体講述本の文章史的性格——『悟道維』と『真政大意』——」『佐賀大國文』10、昭57・11)は、引用書と引用の方法、接続詞の面から、江戸期と明治初年の講述文体とを比較対照して、その相違を説いて文章の近代化を示唆するが、私話的・公話的立場に基づくという処理はおもしろい。また、湯沢茂雄「口語資料としての『古今集遠鏡』」『古典研究』10、昭58・3)は、口語資料として扱われ

ることの多くなった「遠鏡」の資料的価値、および口語の性格を考える上での問題点を挙げる。他資料との関連も考えられ参考となる。ただ、「已然形+バ」の扱い、文語に引きつけられただけの問題ではあるまい。

資料とのかかわりを持つものとして、深井一郎『近世語研究(3)——「狂歌」に対する国語学的考察——』(『語学・文学研究(金沢大)』12、昭58・3)、清水功「近世後期におけるソ系話材語について——柳多留を中心として——」『檀山国文学』7、昭58・3)、山田登徹「醒睡笑の口語性について」(『語文』55・昭57・7)がある。また、①久保由美「浮世草子の語法と文体」(『人文学報』54、昭58・2)、②寺島浩子「京言葉」記述の試み——記述の方法、及び人称代名詞に関する記述——(『橘女子大学研究紀要』10、昭58・7)、③松井利男「敬語転移の一考察——江戸笑話と石門心学を資料として——」(『姫路学院女子短大紀要』10、昭58・3)があるが、①は、作家意識の確立が語法・文体にどのような変化をもたらすか、主に文末形式に焦点をあてて論究した意欲的な論考である。文学作品論をふまえて客観的に実証しようとするところにねらいがあり、二三の新見の提示の見られるところは多とするが、従来の西鶴の語法・文体の研究を果して乗り越えられるかどうか今後の成果を期待したい。②は、資料を欠く近世後期上方語の研究法の一として、現代京阪語の特色をとらえて流れを遡っていく方法を試みたもの。③では、申サレルは謙讓動詞がレルをつけて尊敬の表現に転移したものと説くが、申すがいわゆる丁寧語に転移していることは諸氏によってすでに明らかにされているところである。なお、丁寧語の致スにつき江戸末期以降の下から上への使用が昭和

三十年代を転機として使用の場が限られ、公の場や親しくない間柄でしか使われなくなったと説く、坂本恵「現代丁重語の性質——致すを中心として——」（『国語学研究与資料』7、昭58・12）がある。

通時的考察には、①夏井邦男「比較表現についての史的考察上——下」（『人文論究』42・43、昭57・3、昭58・3）、②山口明穂「江戸時代における已然形把握の一形式」（『国語学史論叢』笠間書院、昭57・9所収）、③鈴木泰「タリ活用形容動詞の通時的変化傾向とその要因」（『武蔵大人文学会雑誌』、57・3）がある。①は、格助詞ニを承けて比較の基準を示す動詞がヨリと結び付くようになった過程を詳細に表示するが事実の指摘にとどまっているのは惜しい。②は、宣長の俗語訳の方法により已然形から仮定形に変遷する一過程を説いたものであるが、ここにいる「仮定形」の意味するところが明瞭さを欠くため已然形が仮定形に置き換えられた説明が判然としない。③は、タリ活用形容動詞が江戸後期を境に連用修飾を表す成分になる傾向の著しいことを示し、その機能の変化をこの語群の有するオノマトベ的性格と和語オノマトベとの相関性に求めたらどうかと提言する。これまでになかった視点から、用法の変遷を具体的にとらえた論考である。

当代の文語については、①畠中真美「西鶴散文作品に於ける『けり』『き』の様相——文末用法を中心として」（『国文』57、昭57・7）、②鈴木丹士郎「西鶴に見える言語史断片」（『武蔵野文学』30、昭57・11）、③岡本勲「幕末維新の新聞の文章——普通文體黎明と近世よりの継承——」（『中京大文学部紀要』昭58・6）がある。①は、キとケリとの終止止めと連体止めの使い分けの実態とその意識とについて触れるが、やはり近世文語の諸事実の中での位置づけが望まれる。②は、

形容詞・助動詞ズの補助活用、四段の下二段化など人工的な文語めかしの実例などを示す。③は、漢文訓読的性格と通俗和文的文脈を基調とする二種の新聞から文の長さや使用の助動詞などを検討し、前者が後の普通文の中核をなす文体を有することを示す。岡本氏には他に普通文を扱った「明治普通文の『たり』と『り』」（『中京大文学部紀要』、昭57・7）、「明治普通文の成熟期と新聞」（『同』、昭58・3）があり、ともに助動詞の文体による使い分けを示し、語数や意味の上で助動詞の体系が著しく簡略化されており、それらの複合で分析的に種々の意味を表すのが当期の新聞のもっとも実用的なスタイルであるという指摘は興味を引く。中古の語法との対比からでなく、このような観点に立って近世文語を検討することが望まれるよう。

○

田中章夫『東京語——その成立と展開——』（明治書院、昭58・11）は、江戸語に触れるところ多く、それもこれまでの町人のことばだけでは説きえない江戸語を、先行論文をふまえて、その都市の発展とともに広い視野から多面的にとらえ構造的に分析しようとした論考である。今後各論への展開が十分予想されるといふ意味でも現代語の成立に関心を寄せるものの必読の書となる。いずれ書評も出ようが、資料を欠く武家ことばを取りあげ、東京山の手ことばの成立において武家ことばの影響は直接的でないとし、上層町人ことばの武家ことばへの接近によっていったん町人ことばに取り入れられ、それが東京語につながっていったという提言は興味ぶかい。これには、明治初期の武家社会の崩壊・四散が論拠となっているがいろいろ論のあるところであろう。武家ことばについては、小松寿雄「近

代の文法Ⅱ(江戸篇)〔『講座国語史・文法史』大修館、昭57・12)に寛永期には形成されたと説くが具体性に欠く。その点坂梨隆三「近代の文法Ⅱ(上方篇)〔同』には七項目にわたる指摘があるが、田中氏を含めていずれも語彙的であり、抽象的な説明で終わっている。小松氏は、江戸語(の形成)は少くとも三つの階層(武家・上層町人・下層町人)語からとらえなければならないとするが、それだけに武家ことば資料の探索・発掘とその体系的な研究を行なう必要があるが、この問題については、社会構造の変化に伴う階層意識の変化を問う必要もあろう。

田中章夫「六方ことばの系譜」〔『語文(大阪大)』40、昭57・11、「六方ことば」として先の『東京語』に改稿所収)は、六方ことばが江戸の下層社会に引き継がれ、現代下町ことばに結び付くことを説く。山の手ことばに目がむかれ、とかく軽視されがちな下町ことばの系統を論じたものとして注目される。ただ、関東方言を取り入れたこの種の表現は、もともとは武士が否定的に受容したものであったが、時代による意識の変化、下層武士の町人化により肯定的に受容するようになったという流れも考慮に入れられないであろうか。なお、都市江戸の風俗・生活に詳しい歴史学者芳賀登氏の『江戸語の成立』(開拓社、昭57・9)は、江戸語の研究成果の取り入れかたに多くの問題があるが、文化史的視点から援用された文献等に見るべきものがある。また、土屋信一編『論集日本語研究15 現代語』(有精堂、昭58・8)は、近世語に関する論文も選択収録され、解題とともに参考文献目録は有益である。

近世語については概して中堅層の研究活動が低調である。「近代語学会」の例会も久しく絶えているが、荒尾禎秀氏および上智大・

国学院大の院生を中心とする「近代語研究会」の例会や、九州大院生による『文献研究』などに新人の台頭を感じさせる秀れた論文・発表をみるが、いっそうの広がり期待したい。また、稲垣正幸・山口豊『新語浮世床総索引』(武蔵野書院、昭58・2)に続き近世口頭語資料を扱った総索引の刊行を待望する。

○

ここではおよそ室町時代から江戸時代末期までの文法に関する研究を取りあげた。また、必要に応じてその時代とつながりを求める先後の時代のものや、語彙・文体・文章や音韻の分野との関連においても触れてみたが紙幅の都合で取りあげられなかったものも多い。また貴重な論考の見落しもある。失礼をおわびしたい。(付記)資料の収集に、瀧本典子氏のご援助を得た。記してお礼申しあげる。

—— 国学院大学教授 ——